

## 映雪草堂本『水滸伝』における補刻の様相 ——圈点を主な手掛かりとして

佐高春音

### はじめに

『水滸伝』の版本は、文章の記述量が多いものを文繁本、少ないものを文簡本としてしばしば大別される。後者のうち、全30巻で構成されることから「三十巻本」と呼ばれる版本があり、現在目にし得る三十巻本『水滸伝』は、パリ国立図書館に所蔵されている1部（巻6第17葉までの残本）と、東京大学文学部漢籍コーナーおよび東京大学総合図書館にそれぞれ所蔵されている2部、合わせて3部のみである。<sup>1</sup>パリ蔵本は封面に蘇州の著名な書坊である宝翰楼の印記が見えることから「宝翰楼（刊）本」<sup>2</sup>、あるいは目録首題が「文杏堂評點水滸傳全本」となっていることから「文杏堂本」という呼称が、東大所蔵の2部は封面に「金間映雪草堂蔵板」とあることから「映雪草堂（刊）本」という呼称が通用している。本稿では前者を「宝翰楼本」、後者を「映雪草堂本」と呼び、両版本をあわせて三十巻本と称する。

1 パリ国立図書館蔵本は、2022年9月現在、フランス国立図書館の電子図書館「Gallica」でモノクロのデジタルデータを公開している。巻首～巻2 <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b100934146>、巻3 <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b10093415n>（最終閲覧日：2022年9月5日）。眉批の上部が裁断され、綴じ部分の周辺に見えにくい部分あり。書入れあり。東京大学蔵本2部は、2022年9月現在、東京大学アジア研究図書館デジタルコレクション「水滸伝コレクション」でフルカラーのデジタルデータを公開している。<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/asia/kanseki-d>（最終閲覧日：2022年9月5日）。東大蔵本2部については筆者が解題を執筆し、『東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）2020-2021年度協働型アジア研究「東京大学所蔵水滸伝諸版本に関する研究」成果報告集』（東京大学消費者協同組合印刷・製本、2022年8月、14頁～28頁）に収録されている。

2 宝翰楼が出版に関わった書物および書坊の実態については、笠井直美「呉郡宝翰楼書目」（『東洋文化研究所紀要』第164冊、2013年）、同氏「呉郡宝翰楼初探」（『古今論衡』第27期、2015年）に詳しい。

三十巻本に関する先行研究は、底本をめぐるものが主流となっており、百二十回本以前の文繁本のいずれかを底本とし、田虎王慶故事は文簡本の志伝評林の系統を利用したとする説〔阿部兼也氏〕、百二十回本を底本とする説〔大内田三郎氏〕、内閣文庫蔵本系統の容与堂本を底本とする説〔劉世徳氏〕、内閣文庫蔵本系統の容与堂本を底本としつつ、田虎王慶故事は百二十回本と文簡本を利用したとする説〔氏岡眞士氏〕などが出されてきた。<sup>3</sup> 宝翰楼本は巻6第17葉までしか残っておらず、その残巻と映雪草堂本の本文には大きな異同がないことから、宝翰楼本と映雪草堂本はまとめて扱われることが多い。

両版本の関係性について言及する数少ない先行研究として、鄧雷氏は「宝翰楼本と映雪草堂本文之前的附件部分差異頗大、并非出自同版、而正文部分則是出自同版（宝翰楼本と映雪草堂本の正文より前の付属部分〔筆者注：序文、挿絵、目録〕は差異が非常に大きく、決して同版ではないが、正文部分は同版である）」と述べるとともに、版木の状態などから両本の刊行時期を宝翰楼本が先、映雪草堂本が後と断定している。<sup>4</sup> また、氏岡眞士氏は、両本の本文に大きな異同はないが、東大蔵本2部には、「覆刻による補配」が随所に見られるほか、「べつに翻刻らしき補配」もあることを指摘し、「パリ本に補配は無く、版木の摩耗も少ない。おそらく東大の2部は後修本であろう」と述べている。<sup>5</sup>

この度筆者が両版本の正文部分に対して校勘作業を行ったところ、両版本の対照可能範囲（巻1第1葉～巻6第17葉）の全135葉のうち、100葉は同版と判断でき、残りの35葉は明らかな異版であることがわかった。同版と見なせる葉では、映雪草堂本において版木の劣化が進んでいること

3 阿部兼也「明代文簡本水滸伝をめぐる問題」（『集刊東洋学』第12号、1964年）、大内田三郎「『水滸伝』版本考——『文杏堂批評水滸伝三十巻本』について」（『天理大学学報』第119巻、1979年）、劉世徳「談『水滸伝』映雪草堂刊本の底本——『水滸伝版本探索』之一」（『明清小説研究』1985年第2期、1985年）、氏岡眞士「三十巻本『水滸伝』について」（『日本中国学会報』第63集、2011年）。

4 鄧雷「三十巻本『水滸伝』研究——以概況、挿図、標目為中心」（『中国典籍与文化』第109期、2019年、33頁）。

5 氏岡、注3前掲論文、96頁。

から、映雪草堂本が宝翰楼本よりも後に刊行されたことは確実である。両版本の本文自体に大きな異同がないことは確かだが、本文に付された諸記号や評語には違いがある。更に、これらの本文以外の要素をどのように処理するかという点において、映雪草堂本の補刻葉はいくつかの種類に分けることができる。つまり、映雪草堂本は宝翰楼本と同一の版木と、その版木で刷られた葉を底本として新たに作られた数種類の補刻葉とで構成されており、対照可能範囲に限って言えば、全体の約 26% が補刻葉に該当することになる。

映雪草堂本の補刻の割合や様相については先行研究の中で十分に言及されておらず、より詳細な分析・検討が必要であると考ええる。本稿では、これまで着目されることが少なかった本文に付される諸記号を主要な手掛かりとして、映雪草堂本の補刻の様相と特徴性を明らかにしていきたい。なお、本文に付される諸記号には、文章の読みどころなどを強調するために用いられる批評行為に関わる記号（所謂「評点」）と、文の間（ポーズ）や構造を示す区切記号や、人名・地名を示す傍線などの、文章の理解を補助するための記号（所謂「標点」）があり、本稿ではこれらの諸記号を総称して「圏点」と呼ぶこととする。<sup>6</sup>

## 1. 現存する三十巻本の基本情報

まず初めに、現存する 3 部の三十巻本について基本的な情報をまとめておく。

### ■ 宝翰楼本…現存 1 部

パリ国立図書館蔵。巻 6 第 17 葉までの残本。

封面に「李卓吾原評／忠義水滸全傳／本衙蔵板」とあり、「寶翰樓章」の印記を捺す。

初めに「五湖老人題於蓮子峰小曼陀精舍」と末尾に記す無紀年の「水滸

6 「圏点」は批評行為に関わる記号のみを指して使われる場合もあり、その指示範囲は使用者により異なっているのが現状である。

傳全本序」、続いて版心に「水滸傳全像」と記した挿絵 23 葉、更に「文杏堂評點水滸傳全本」と題する目録があり、正文に入る。

正文の版心題「水滸傳全本」。巻首題「水滸傳全本」、各巻首題の次行に「元施耐菴編 明李卓吾評點」とある。

# ■ 映雪草堂本…現存 2 部。

①東京大学文学部漢籍コーナー蔵。完本。

②東京大学総合図書館蔵。巻 3 第 1 葉および第 2 葉の全てと、同第 3 葉から第 8 葉の上部を欠く。

封面に「施耐菴原本」「李卓吾先生評／水滸全傳／金閨映雪草堂蔵板」とある。

初めに「五湖老人題於蓮子峰小曼陀精舎」と末尾に記す無紀年の「水滸全傳序」、次に「金聖歎評水滸全傳」と題する目録があり、続いて版心に「水滸傳全像」と記した挿絵 20 葉があり、正文に入る。

正文の版心題「水滸傳全本」。巻首題「水滸傳全本」、各巻首題の次行に「元施耐菴編 明李卓吾評點」とあるが、巻 24 は「明李卓吾評點」の箇所が「堂主人評點」となっており、一部の巻は「明」「李卓吾」を欠くなど、表記に揺れがある。

東大蔵本 2 部は、内容に相違なく、版木の摩耗・断裂・欠損がほぼすべての葉において極めて高い割合で一致することから、同じ版木のセットで構成されていると結論できる。版木の状態に目立った差が認められず、両本共に紙屋のものと思しい同一の朱印「同昌字號／本廠監造」が捺されていることから<sup>7</sup>、刷られた時期も近いものと考えられる。この 2 部は完全な同版だが、総合図書館蔵本は欠葉があり、文学部蔵本と比べて紙の状態が

7 当該の朱印は総合図書館蔵本の第 4 冊巻 8 第 9 葉および第 7 冊巻 17 第 10 葉、文学部蔵本の第 4 冊巻 9 第 26 葉と同冊巻 10 第 18 葉に見える。

悪く、多量の手入れがあって版面の詳細を確認しにくい<sup>8</sup>、今回の宝翰楼本との校勘作業には主に文学部蔵本を用いたことを付言しておく。

先行研究でも指摘されている通り、宝翰楼本と映雪草堂本は正文より前の要素に顕著な相違がある。<sup>9</sup> まず、封面の情報は先に挙げたように全く異なっている。序文は五湖老人のものを載せる点は共通するが、映雪草堂本は抄録であり、序首題も版式も異なる。挿絵は大部分が同版であるものの、宝翰楼本における「又三」葉、「又十」葉、第20葉、第21葉と同絵柄の挿絵が映雪草堂本になく、映雪草堂本における第7葉と同絵柄の挿絵が宝翰楼本になく、同一の絵柄でも葉数表記が異なる葉が存在するなどの違いがある。<sup>10</sup> 目録首題を、宝翰楼本は「文杏堂評點水滸傳全本」、映雪草堂本は「金聖歎評水滸傳全傳」としており、標目の字句にも異なる部分がある。また、宝翰楼本は封面、序、挿絵、目録の順に載せ、映雪草堂本は封面、序、目録、挿絵の順に載せるなど、構成にも違いがある。

両版本の正文は、一部の誤刻と思しい箇所を除いて本文自体に異同はないものの、本文に付された諸記号や眉批には違いがある。本稿の主眼はこの違いについて分析・検討していくことにあるが、その前に正文部分の版面上の特徴をまとめておきたい。下記に挙げる情報は宝翰楼本残巻の全体に共通するものであり、映雪草堂本において宝翰楼本と同一の版木が用いられている葉にも該当するものである。筆者は前節において、両版本の対照可能範囲内の全135葉のうち、100葉は同版、残りの35葉は異版で

8 当該の手入れは主として江戸時代に行われたものと見られ、当時の日本人がどのように『水滸伝』を読んだかという点において貴重な資料となっている。総合図書館蔵本の書入れについては荒木達雄氏が分析を進めており、これまでに学会報告「日本人如何閱讀『水滸伝』? ——以『水滸伝全本』為例」(「観念的旅行」国際学術研討会、2021年)などで研究成果を発表している。

9 鄧雷、注4前掲論文および氏岡、注3前掲論文。

10 三十巻本の挿絵は、半葉の中に異なる場面の絵柄を複数まとめて配置するという珍しい構成になっている。鄧雷前掲論文は、挿絵部分の底本について、基本的には容与堂本を底本として加工編集し、田虎王慶故事の部分は文簡本のもを底本としたと分析している。

あると述べた。同版であることの判断基準は、版面の内容が一致しているのに加えて、版木の断裂・欠損が複数箇所以上一致していることである。当該の断裂・欠損と摩耗の度合いが映雪草堂本で進んでいることから、映雪草堂本は宝翰楼本よりも後に印行されたものと結論できる。

・ 版式

四周单边、無界、每半葉 10 行× 20 字。白口、単魚尾。白魚尾と黒魚尾が混在する。葉により些か字様のばらつきがある。

・ 評語

多くの葉に眉批を載せる。眉批は 1 行 3 字。巻末には行書写刻体の総評を載せる。

・ 圈点

a. 区切記号：全葉に付加。断句には基本的に黒点【、】を用いるが、小さな白丸【○】が集中的に使用される部分もあり、三角形【△】が用いられることもある。これらはみな文字の右下に付される。場面や話題の転換点と思しき箇所には直角記号【└】も時折見られる。この記号のみ文字の左下に付される。<sup>11</sup>

b. 強調記号：ほぼ全葉に付加。黒点【、】の使用が最も多く、次いで白丸【○】や三角形【△】が多い。少数ながら二重丸【◎】や長方形【□】の使用も認められた。これらはみな文字の右脇に付される。

c. 人名・地名を示す傍線：人名の右横には単線を引き、地名の右横には縦が長い長形状の傍線が付されることが多い。人名を示す傍線は、姓を含む呼称全体に引かれる場合（例：魯達、魯提轄）と、姓を除いた呼称にのみ引かれる場合（例：林冲、高太尉）がある。宝翰楼本は、巻 1 首から巻 3 第 3 葉までは主に前者、巻 3 第 4 葉から巻 6 第 17 葉までの各葉は主に後者を採用しており、人名を示す傍線の付加方法には部分的なまとま

11 鄭振鐸「巴黎国家図書館中之中国小説与戯曲」に収められている『文杏堂批評水滸伝』（筆者注：本稿で言うところの宝翰楼本）の解題では、「有應該划分段落之处、便似一个└划分之（段落を分けているだろう箇所では、└に似たものでこれを区切っている）」として、この記号が特に取り上げられている。鄭振鐸『中国文学研究（下）』（人民文学出版社、2000 年、407 頁）。

りが見られる。

宝翰楼本における版式、字様、圈点の付加方法が全体を通して高度に統一されているとはいい難いが、少なくとも現存の葉については、ある程度の統一性を保っていると言える。これに対して、映雪草堂本は近接する葉であっても眉批・圈点の有無や圈点の付加方法に違いが見られ、版木の断裂・欠損の度合いや漫漶の度合いもまちまちで、版面の全体的な統一性を著しく欠く。顕著な例を挙げると、巻5第15葉は眉批がなく、本文には全く記号が付されていない。次の第16葉から第18葉では、上部に眉批が現れ、本文に多くの諸記号が付されている。これらの葉では漫漶が比較的目立つ。次の第19葉から第22葉では、再び眉批がなくなり、人名・地名を示す傍線を除いて本文に記号が付されない。人名を示す傍線は姓を含む呼称全体に引かれている。漫漶は極めて少なく、刻字は精緻である。次の巻6第1葉は、眉批がなく、人名・地名を示す傍線を除いて本文に記号が付されないという点は前の葉と共通するが、人名を示す傍線は姓を除いた呼称にのみ引かれている。前の葉と比べて刻字は大分劣る。

映雪草堂本に見えるこのような統一性の欠如は、同版本が宝翰楼本と同一の版本と、その版本で刷られた葉を底本として作られた補刻葉とで構成されていることに加え、補刻葉の中にもいくつかの種類が存在することに起因している。次節から本題に入り、映雪草堂本の補刻の様相について検討していきたい。

## 2. 映雪草堂本における補刻葉の種類

映雪草堂本において、宝翰楼本と同本の対照可能範囲（巻1第1葉～巻6第17葉）の全135葉のうち、100葉は宝翰楼本と同じ版本が使用されており、残りの35葉は宝翰楼本とは異なる版本が使用されている。この35の補刻葉は、眉批と圈点をどのように処理しているかという観点から、以下の4種類に分けることができる。なお、本稿の末尾に各補刻葉の画像を

半葉ずつ例として挙げているので、適宜参照していただきたい。<sup>12</sup>

■ 補刻葉 A——眉批・圈点に至るまで底本を再現。【図 1】

該当葉：巻 2 第 22 葉、巻 4 第 5・6 葉〔全 3 葉〕

本文だけでなく、眉批や圈点に至るまで、できるだけ底本をそのまま再現しようとする意図が見て取れる。字様・字間も底本に似る。ただし文字や記号の細部には些かの違いがあり、完全にそっくりとまでは言い難い。本文に付された記号の形や傍線の長さの違いなどは特にわかりやすい。また、巻 4 第 5 葉表 2 行目の一番下の字を宝翰樓本は「楊」としているが、映雪草堂本は「的」としている。これに続く文は「志先把弓虚扯一扯」であるため、「楊志先把弓虚扯一扯（楊志はまず空弓を引いてみた）」とするのが正しく、映雪草堂本は誤っている。何らかの理由で誤刻が生じたものと考えられる。このような版面上の内容の違いが存在するだけでなく、宝翰樓本に見える版木の断裂や匡郭の欠けが映雪草堂本の同部分には見られないことから、両本が異なる版木を用いていることは明らかである。この種の補刻葉をつくる際には、被せ彫りか敷き写しの手法を用いて覆刻した可能性が高い。

■ 補刻葉 B——本文：底本を概ね再現。眉批：全て削除。圈点：概ね削除。【図 2】

該当葉：巻 2 第 11・12・17・21 葉、巻 3 第 17・18・19・20・21・22 葉、巻 4 第 9・10・11・12・21・24・27・28・29・30 葉、巻 5 第 11・15 葉〔全 22 葉〕<sup>13</sup>



本文の部分は底本を概ねそのまま再現しており、字様・字間も比較的底



12 本稿で引用する映雪草堂本の画像は、全て東京大学アジア研究図書館デジタルコレクション「水滸伝コレクション」上で公開されている「水滸傳全本 三十巻〔漢籍：D（貴重書）〕（東京大学文学部所蔵）を改変（トリミング・色調補正のみ）したものである。

13 巻 2 第 21 葉、巻 4 第 29・30 葉は巻末総評の部分にあたる。総評に附された圈点も全て削除されている。



本に似る。特にわかりやすい例を挙げると、宝翰楼本は巻3第24葉の各行4字目と5字目の間が大きく空いており、映雪草堂本も当該の字間をそのまま反映している。ただし映雪草堂本の補刻葉Bの刻字は、葉によって程度の違いはあるものの、宝翰楼本や補刻葉Aに比べると粗雑であり、誤刻もしばしば見られる。

たとえば巻2第12葉裏の「騎」の漢字のつくりが「哥」に、巻4第9葉裏の「早」が右に示す字形【】に、同巻第11葉表の「學」が「字」のような字形（【】）になっている。このような「早」や「學」の変形した字体は、補刻葉をつくる際、底本の文字の下半分あるいは上半分が見えにくくなっており、その不完全な字形をそのまま反映したことに起因するものと考えられる。また、巻3第17葉裏の最終行「驚得呆了（驚いて呆然とした）」を映雪草堂本は「驚得暈了」としており、これでは意味が通らない。宝翰楼本の時点で「呆了」のあたりが既に欠けはじめているため、不完全な字形を元に形だけ似た字を補ってしまった結果と言えるかもしれない。このほか、巻4第10葉裏最終行「就路上（路上において）」の「就」の部分が映雪草堂本では墨格になっている。

このように、本文については誤刻と思しい箇所を除いて異同がないものの、本文以外の要素には顕著な違いがある。まず、宝翰楼本にはあった眉批が映雪草堂本では全て削除されている。次に、区切記号、強調記号、人名・地名を示す傍線などの諸記号もほぼ全て削除されている。稀に強調記号以外の記号が残っていることもあるが、全体的に少数であることと、付加箇所法則性が見受けられないことを考えると、意図的に残されたものではなく、不注意により本文の文字と共に転記されたものと判断するのが妥当である。また、巻3第22葉表2行目「怪」の字の左下に宝翰楼本は直角記号【】を付しているが、映雪草堂本の同箇所には「一」のような線が見える（【】）。これは直角記号の横線のみが反映されているものだろう。

最後に版式の違いについて補足すると、巻2第21葉および巻3第21・22葉の魚尾が、宝翰楼本は白魚尾、映雪草堂本は黒魚尾になっている。

写字工（版下書）が新たに版下を作り、刻工（彫師）がそれに基づいて彫り進めたのであれば、上述の誤刻や中途半端な圈点の付加は生じにくい

はずである。この種の補刻葉をつくる際には、底本の刷り紙をそのまま版下に用いて覆刻した可能性が高く、識字能力の低い刻工が覆刻作業に携わっていた可能性も想定される。

■ 補刻葉 C——本文：底本を概ね再現。眉批：全て削除。圈点：強調記号は全て削除、区切記号は概ね削除、人名・地名を示す傍線はある程度保留。【図 3】

該当葉：巻 6 第 1・2・11 葉〔全 3 葉〕

本文の部分は底本を概ねそのまま再現しており、字様・字間も比較的底本に似る。刻字は補刻葉 B よりも丁寧であり、補刻葉 B にしばしば見られる顕著な字形の誤刻はない。眉批は全て削除されており、圈点についても、強調記号は全て削除され、区切記号は多少残っている箇所があるものの概ね削除されている。しかし、人名・地名を示す傍線はある程度保留されており、この点が補刻葉 B と大きく異なる。

宋江を例にとると、宝翰楼本は巻 6 第 1 葉において計 2 箇所の「宋押司」の「押司」および計 2 箇所の「宋江」の「江」、同第 2 葉において計 10 箇所の「宋江」の「江」、同第 11 葉において計 11 箇所の「宋江」の「江」に傍線を引いている。一方、映雪草堂本は巻 6 第 1 葉において計 2 箇所の「宋押司」の「押司」および計 2 箇所の「宋江」の「江」、同第 2 葉において計 6 箇所の「宋江」の「江」、同第 11 葉において 8 箇所の「宋江」の「江」に傍線を引いている。減っている箇所はあるものの、ある程度保留されていると言って差し支えないだろう。<sup>14</sup>

地名を示す傍線について言うと、宝翰楼本は巻 6 第 1 葉表において「鄆城」「済州」「梁山泊」の右横にそれぞれ長形状の傍線を付しており、映雪草堂本もそれらを再現している。ただし映雪草堂本には同葉裏の「梁山泊」に付された長形状の傍線がなく、同葉裏の「鄆城」および第 2 葉の「東京」に付されている長形状の傍線が、人名を示すときに用いるのと同じ単線に変わっている。第 11 葉にはもともと地名を示す傍線の使用箇所が

14 宝翰楼本において人名を示す傍線は全体を通して概ね満遍なく付加されているが、漏れが生じていると思われる部分も少なからず存在する。

ない。以上のように、地名を示す傍線も、全て厳密に再現されているわけではないが、ある程度は保留されていると見なすことができるだろう。

このほかに注目したい点として、巻6第11葉裏2行目の「了」には漢字に接する形で黒点がついており（【了】）、同葉3行目の「只」の右側には短めの縦線がついている（【只】）。宝翰楼本が当該部分の付近にそれぞれ区切記号【、】を付していることをふまえると、前者は区切り記号を漢字の一部分と間違えて彫り、後者は人名を示す傍線と間違えて保留したものであるかもしれない。このような例を見るに、補刻葉Cをつくる際にも、先述の補刻葉Bと同様に、底本の刷り紙をそのまま版下に用いて覆刻した可能性が高く、識字能力の低い刻工が覆刻作業に携わっていた可能性も想定される。

■ 補刻葉D——本文：底本の内容を再現。眉批：全て削除。圈点：強調記号と区切記号は全て削除、地名を示す傍線は保留、人名を示す傍線は新たに引き直し。【図3】

該当葉：巻4第1・2葉、巻5第19・20・21・22葉、巻6第12葉〔全7葉〕

底本の本文内容を再現するが、字様・字間の底本との類似度は比較的低い。補刻葉A・B・Cと比べて刻字が精緻であり、全体的に文字や匡郭が太く、濃く、くっきり紙に写っている。眉批は全て削除されている。巻6第22葉の巻末総評にあたる部分にのみ強調記号と区切記号が付されているのを除いて、その他の部分は強調記号と区切記号が全て削除されている。人名・地名を示す傍線が使用されている点は補刻葉Cと同じだが、人名を示す傍線の付加方法に大きな違いがある。補刻葉Dでは、底本で用いられている傍線をそのまま保留するのではなく、新たに引き直しを行い、傍線が姓を含む呼称全体に掛かるよう統一を図っているのである。

巻6第12葉を例にとると、宝翰楼本は「宋江」「唐牛児」「唐二」「閻婆」「張文遠」といったように、姓を除いた呼称のみに傍線を引くが、映雪草堂本はこれらに対して修正を加え、「宋江」「唐牛児」「唐二」「閻婆」「張文遠」といったように、姓を含む呼称全体に傍線を引き直している。宝翰楼本にも姓を含む呼称全体に傍線を引く葉は存在するが、宝翰楼本における当該

の7葉は全て姓を除いた呼称のみに傍線を引いている。映雪草堂本は明らかな意図をもって、新たに傍線を引き直しているのである。両版本の対照可能範囲において、映雪草堂本が姓を含む呼称全体から姓を除いた呼称のみに傍線を引き直しているという反対のパターンは見当たらない。

最後に版式の違いについて補足すると、巻5第19葉から22葉が、宝翰楼本は白魚尾、映雪草堂本は黒魚尾になっている。補刻葉Dの該当葉は全て黒魚尾である。<sup>15</sup>

前述の通り、補刻葉A・B・Cは底本を覆刻して作られた可能性が高いが、補刻葉Dは該当葉の版面上の特徴を考えるに、写字工が底本を模倣して新たに版下をつくり、その版下に基づいて作業した——つまり、覆刻ではなく翻刻の手法を採用した可能性が高いと言えよう。

### 3. 映雪草堂本における補刻葉の分布状況

前節で確認した補刻葉の分布状況がわかりやすいよう、次頁に一覧表を示す。適宜ご参照いただきたい。

さて、補刻葉がつくられた背景には、当該部分の版木が無くなってしまった、版木が劣化するなどして使用に不便が生じた、といったような事情があったものと考えられる。宝翰楼本の当該葉を見てみると、一部に断裂や漫漶がやや目立つ葉はあるものの、その他の葉よりも特別に版木の状態が悪いというわけではなさそうである。<sup>16</sup> 現存する宝翰楼本が刷られた後、補刻の必要が生じるまで版木が劣化した可能性があるが、映雪草堂本には版木の摩耗や欠損によって一定範囲の文字が読めなくなっている葉も含まれており、刊行の際に版木の劣化がどの程度まで許容されていたのか気になるところである。

15 本稿の最後で軽く触れるが、両版本の対照範囲外にも補刻葉Dの特徴と合致する葉が一定数見受けられる。これらの葉には例外なく黒魚尾が用いられている。

16 パリ蔵本は横割れの周囲の読みにくくなっている文字を補抄している箇所がある。

## 【一覧表】

	卷	葉		卷	葉		卷	葉		卷	葉		卷	葉		卷	葉
同版	1	1	同版	2	8	同版	3	13	同版	4	16	同版	5	13			
同版	1	2	同版	2	9	同版	3	14	同版	4	17	同版	5	14			
同版	1	3	同版	2	10	同版	3	15	同版	4	18	補刻葉 B	5	15			
同版	1	4	補刻葉 B	2	11	同版	3	16	同版	4	19	同版	5	16			
同版	1	5	補刻葉 B	2	12	補刻葉 B	3	17	同版	4	20	同版	5	17			
同版	1	6	同版	2	13	補刻葉 B	3	18	補刻葉 B	4	21	同版	5	18			
同版	1	7	同版	2	14	補刻葉 B	3	19	同版	4	22	補刻葉 D	5	19			
同版	1	8	同版	2	15	補刻葉 B	3	20	同版	4	23	補刻葉 D	5	20			
同版	1	9	同版	2	16	補刻葉 B	3	21	補刻葉 B	4	24	補刻葉 D	5	21			
同版	1	10	補刻葉 B	2	17	補刻葉 B	3	22	同版	4	25	補刻葉 D	5	22			
同版	1	11	同版	2	18	同版	3	23	同版	4	26	補刻葉 C	6	1			
同版	1	12	同版	2	19	同版	3	24	補刻葉 B	4	27	補刻葉 C	6	2			
同版	1	13	同版	2	20	補刻葉 D	4	1	補刻葉 B	4	28	同版	6	3			
同版	1	14	補刻葉 B	2	21	補刻葉 D	4	2	補刻葉 B	4	29	同版	6	4			
同版	1	15	補刻葉 A	2	22	同版	4	3	補刻葉 B	4	30	同版	6	5			
同版	1	16	同版	3	1	同版	4	4	同版	5	1	同版	6	6			
同版	1	17	同版	3	2	補刻葉 A	4	5	同版	5	2	同版	6	7			
同版	1	18	同版	3	3	補刻葉 A	4	6	同版	5	3	同版	6	8			
同版	1	19	同版	3	4	同版	4	7	同版	5	4	同版	6	9			
同版	1	20	同版	3	5	同版	4	8	同版	5	5	同版	6	10			
同版	2	1	同版	3	6	補刻葉 B	4	9	同版	5	6	補刻葉 C	6	11			
同版	2	2	同版	3	7	補刻葉 B	4	10	同版	5	7	補刻葉 D	6	12			
同版	2	3	同版	3	8	補刻葉 B	4	11	同版	5	8	同版	6	13			
同版	2	4	同版	3	9	補刻葉 B	4	12	同版	5	9	同版	6	14			
同版	2	5	同版	3	10	同版	4	13	同版	5	10	同版	6	15			
同版	2	6	同版	3	11	同版	4	14	補刻葉 B	5	11	同版	6	16			
同版	2	7	同版	3	12	同版	4	15	同版	5	12	同版	6	17			

補刻葉の分布に注目すると、同種の補刻葉が2葉連続している傾向があることに気づく。宝翰楼本には細い線状の横割れがしばしば見られるが、その断裂の箇所は2葉ごとに一致していることが多く、連続する2葉が版木の表裏両面に彫られたものと推測される。補刻葉が2葉連続していることが多いのは、連続する2葉を両面に彫る1枚の版木が、まるごと無くなったか使用できなくなったことにより、2葉ぶんの補刻葉をつくる必要が生じたためと考えられる。<sup>17</sup>

<sup>17</sup> 版木の節約という点を考えれば、新しく制作された補刻葉も版木の表裏両面に彫られた可能性が高い。ただし補刻葉には断裂の一致などのわかりやすい判断材料が確認できず、推測の域を出るものではない。

ただし、1葉単位で補版されている補刻葉も一定数存在する。たとえば宝翰楼本の巻2第17・18葉は、いずれも下から5字目～4字目の間に断裂があり、同じ版木の両面に彫られたものと推測される。映雪草堂本の同巻第17葉は宝翰楼本とは異版の補刻葉だが、第18葉は宝翰楼本と同じ版木を用いており、上述の断裂も一致する。つまり、何らかの理由によって版木の片面だけが使用できなくなり、使える方の片面はそのまま利用しつつ、使えなくなった片面については、新しく補刻葉を制作したということである。

巻2第21・22葉と巻6第11・12葉は特殊で、異なる版面上の特徴を持つ補刻葉（前者は補刻葉B・A、後者は補刻葉C・D）が連続している。巻2第21葉の後ろから2行目以降は総評の部分にあたるが、第21葉内の総評には区切記号が付されないのに対し、第22葉内の総評には区切記号が付されているという違いが存在する。巻6第11・12葉については、末尾に挙げた参考画像【図3】を見てもわかる通り、版面の様子が全く異なっている。このような補版の背景はまだ十分に検討できておらず、今後の課題としたい。

#### 4. 補刻の様相から窺える編集方針

映雪草堂本の補刻葉は、眉批と圈点をどのように処理しているかという観点から4種類にわけることができた。本文だけでなく眉批や圈点に至るまで底本を再現する補刻葉Aの3葉を除いて、補刻葉B・C・Dには、眉批・強調記号・区切記号がいずれも付されないという共通点が存在する。<sup>18</sup> 担当した刻工の手抜きや不注意によって一部の眉批や圈点が版刻されなかった可能性や、版木の摩耗・欠損によって一部の眉批や圈点が紙に転写されていない可能性も想定し得るが、補刻葉B・C・Dに分類した全32葉には眉批と強調記号が一切なく、区切記号も少数の例外を除いてほぼないことを考えると、これらの全てが担当した刻工のミスや版木の摩耗・欠損によ

18 先にも述べた通り、強調記号以外の記号が稀に残っている箇所も見受けられるが、間違えて転記したものと考えられる。

ってもたらされたものだと判断するには無理がある。

より妥当なのは、補刻葉をつくる際に、“本文は底本を再現、眉批と圈点は全て不要”、“本文は底本を再現、眉批と圈点は不要、ただし例外として人名・地名を示す傍線だけは必要”といった方針が定められ、その方針と指示に従って作業が進められたという考え方である。編集方針を定める主体については、書坊の上層部がまず思い浮かぶが、あるいは書坊から仕事を請け負った職人集団の親方的存在であるかもしれない。<sup>19</sup>

ただし、補刻葉Aは対照可能範囲内の該当葉が全3葉と少数であり、眉批と圈点は不要という方針が定められたものの、担当職人の独自判断あるいは担当職人に対する方針の伝達不足によって、本文以外の要素まで再現されたのか、眉批・圈点に至るまで忠実に底本を再現するという、他の補刻葉の制作時とは異なる方針が打ち出された結果なのか、判断しがたいところがある。補刻葉Cについても、対照可能範囲内の該当葉が3葉しかなく、上で述べたのと同じように、眉批と圈点は不要という方針が定められたにも関わらず、担当職人の独自判断あるいは担当職人に対する方針の伝達不足によって、人名・地名を示す傍線のみが残ったのか、眉批と圈点は不要、ただし例外として人名・地名を示す傍線だけは必要であるとする、補刻葉A・Bの制作時とは異なる方針が打ち出された結果なのか、判断が難しい。

一方、補刻葉Dは人名・地名を示す傍線を保留しているだけでなく、もともと姓を除いた呼称に引かれていた傍線を、姓を含む呼称全体に徹底して引き直している。眉批と圈点は不要、ただし例外として人名・地名を示す傍線だけは必要であるとする方針、更に付け加えれば、人名を示す傍線は姓を含む呼称全体に引くという方針が、担当した職人の判断ではなく、より上層の判断として存在していたと考えられる。また、補刻葉Dは全体的に漫漶が少なく、墨跡がはっきりしており、他の補刻葉と比べて版木が

19 大木康氏は、明末において刻書費用が低下した理由の一つとして、「一人の親方がまるごと請負ってきた仕事を刻工たちに分業によって雕らせる」といった「刊刻作業における分業化の進展」を挙げている。大木康『明末江南の出版文化』（研文出版、2004年、68頁～69頁）。



新しいように見える。このことから、筆者は補刻葉Dが他の補刻葉よりも遅れて作られたのではないかと推測している。

以上をふまえると、映雪草堂本の補刻葉は、少なくとも2つ以上の段階（補刻葉A・B・Cが1つの段階、補刻葉Dが別の段階に分かれるものとして想定）、多くて4つ以上の段階（補刻葉A・B・C・Dがそれぞれ異なる段階に分かれるものとして想定）にわたって制作されており、その間に編集方針にも転換が生じているものと考えられる。

続いて、編集方針という観点から、映雪草堂本に見える補刻葉の特徴をもう一度整理してみたい。

#### (1) 眉批と強調記号を削除——該当：補刻葉B、C、D

映雪草堂本の封面には「李卓吾先生評」の表記があり、多くの巻首には「明李卓吾評點」の表記があり、目録首題には「金聖歎評」の表記がある。小説の評点は明末清初に最も盛行し、名家の評点つきであることを売りにする書物が多く刊行された。実情に反して名家の名のみを借りる行為も横行しており、本書に名が挙げられている李卓吾と金聖歎は、仮託されることの多い名家の筆頭である。映雪草堂本は李卓吾や金聖歎といった名家の評点がついていることを謳っているものの、補刻葉をつくる段階において、評点の重要部分を構成する眉批と強調符号を全て削除している。このようなやり方は不誠実に思えるが、当時はタイトル上で評点つきであることを謳いつつ、その中身には初めから一切の評点が無いという書物も流通していたといい、それほど珍しいことではなかったようである。<sup>20</sup>

#### (2) 区切記号を削除——該当：補刻葉B、C、D

管錫華氏の研究によると、甲骨文の中には既にいくらかの標点符号が認められ、西漢早期の竹簡の中には、現代の中国語における逗号（読点）と

20 明末清初における通俗小説の評点とその出版については、主に以下を参考にした。譚帆『中国小説評点研究』（華東師範大学出版社、2001年）、謝君『明清書坊業与通俗小説研究』（中国社会科学出版社、2021年）。



形態および働きが完全に一致する標点符号が見られるという。<sup>21</sup> 筆者が本稿で区切記号と称している文の間（ポーズ）や構造を示す記号は相当早くから出現しているようである。しかし、中国の長い歴史において、これらの記号は必ずしも書物に不可欠なものではなく、文学的素養を備えた知識人にとっては、時に無用の長物ともいえるものであった。明末に至り、出版文化が花開くと、書物の読者層は一般民衆にまで拡大していき、『水滸伝』のような通俗白話小説が大いに流行する。区切記号は書物を読み慣れない読者が文章を理解するのに有用であるため、白話小説の刊行にあたって積極的に取り入れられるようになっていった。一般民衆にまで広がった読者に対する一種のサービスと言ってよいだろう。<sup>22</sup> 結果だけを見れば、映雪草堂本の補刻葉では庶民向けの読者サービスが減らされていることになる。

### (3) 人名・地名を示す傍線を付加——該当：補刻葉 C、D

人名・地名を示す傍線は、上述の区切記号と同様に、書物を読み慣れない読者や知識が乏しい読者が文章を理解するのに有用であり、庶民向けの読者サービスの一種と見なすことができる。興味深いのは、補刻葉をつくる段階において、他の諸記号は削除しているにも関わらず、人名・地名を示す傍線のみ採用している点である。特に補刻葉 D は人名を示す傍線があえて引き直されており、単に人名の部分に傍線を引けばよいというわけではなく、姓を含む呼称全体に傍線を引くことに対する強いこだわりを感じさせる。姓を除いた呼称にのみ傍線を引く場合、当然のことながら、どの部分が姓でどの部分がそうでないかを判断する必要があり、2 字以上の姓をもつ登場人物や漢族ではない登場人物の人名を示す際には、時として困難が生じる。映雪草堂本の中にも、「呼延灼」と「呼延灼」、「方臘」と

21 管錫華『中国古代標点符号發展史』（巴蜀出版社、2002 年、31 頁および 68 頁）。

22 明末清初の出版文化と読者の問題については、大木康『中国明末のメディア革命—庶民が本を読む—』（刀水書房、2009 年）に詳しい。大木氏は固有名詞に付す傍線などの「読解を容易にするための措置」を「読者へのサービス」と表現している。同書 134 頁。

「方臘」などの表記の揺れが散見する。補刻葉D制作時には、このような問題を避けるため、より効率的な方法が採用されたのかもしれない。

さて、これまでに見てきた編集方針の背景には、一体どのような目的が想定され得るのだろうか。小松謙氏は、「石渠閣補刻本」と称される『水滸伝』の版本について論じた際に、「暦とした知識人が読むための、刊行者が高級と自認する書物には、挿絵・句読点・圈点・批評などは附されないのが一般的である」と述べ、「挿絵も句読点・圈点も批評もない石渠閣補刻本のスタイルは、知識人向けの刊行物と合致していることがわかる」と述べている。<sup>23</sup> 映雪草堂本にはそのいずれもが付されているが、補刻葉制作時には眉批と諸記号を削除する方針が採られ、その点だけを見れば、小松氏が言うところの「知識人向けの刊行物」のスタイルに近づいている。とはいえ、映雪草堂本の補刻葉には粗雑な刻字や誤刻も目立ち、知識人向けの体裁への方向転換を目的として前述の処置が行われたとは考えにくい。

やはりその最大の目的は、コスト削減（労働力や時間の削減を含む）にあったと考えるのが妥当だろう。そのような目的のもとで第一に検討され得るのは、何を省略し何を保持するかという優先順位である。たとえば補刻葉Dの制作段階において、人名・地名を示す傍線は、他の要素を削ったとしても残しておくべき重要度の高いサービスと判断されたのではないだろうか。映雪草堂本の補刻葉から窺われる編集方針は、読者のニーズをある程度反映したものであるとも考えられる。

これまでの版本研究では、本文の異同のみが校勘の対象となることが多く、評語や圈点に対する校勘は十分に行われてこなかった。特に圈点、その中でも批評行為に関わらない区切記号や人名・地名を示す傍線などは、

23 小松謙「『水滸伝』石渠閣補刻本本文の研究」（『中国文学報』第91冊、2018年、127頁）。小松氏が言うところの「句読点」と「圈点」は本稿における「区切記号」と「強調記号」に該当するものと考えられる。

ほとんど注目されてこなかったと言ってよい。<sup>24</sup>しかし、ある書物の展開を緻密に捉えようとするならば、評語や圈点などの本文の付加要素を含め、書物に生じたあらゆる変化を考慮する必要があるだろう。また、今回筆者が取り上げたのは映雪草堂本という個別の事例だが、このような個別の事例に対する研究が積み上がっていくことにより、明清時代における書物の編集・出版方針、読者のニーズ、書物の形態のトレンドなどの全体像が浮かび上がってくるはずである。今後は本稿を足掛かりとして、引き続き諸版本の評語や圈点に目を向けていきたい。

## おわりに

本研究では映雪草堂本と宝翰楼本という現存する2種類の三十巻本『水滸伝』の正文部分に対する校勘を行い、以下のことを明らかにした。第一に、映雪草堂本は宝翰楼本と同一の版本と、その版本で刷られた葉を底本として作られた数種類の補刻葉とで構成されている。両版本の対照可能範囲において、前者は100葉、後者は35葉認められ、補刻葉の割合は約26%に相当する。第二に、両版本の本文に大きな異同はないが、眉批・圈点の有無や圈点の付加方法には違いが存在する。映雪草堂本の補刻葉は、眉批と圈点をどのように処理しているかという観点から4種類にわけることができる。その制作は複数の段階にわたっている可能性が高い。第三に、映雪草堂本の各種の補刻葉からは、制作時の編集方針が窺われる。全体的な傾向としてコスト削減が図られているが、庶民向けの読者サービスの一つである固有名詞の傍線のみ保持するものもあり、読者のニーズをある程度反映している可能性がある。

残念なことに、現在我々が目にし得る唯一の宝翰楼本は巻6第17葉ま

24 批評行為に関わらない諸記号にも目を向けている数少ない先行研究として、大木康氏は馮夢龍が関わった著作を対象に、本文中の傍圈、傍点、固有名詞の傍線等を含む評点の使用状況を調査し、その傾向について論じている。大木康『馮夢龍と明末俗文学』（汲古書院、2018年）、第八章「馮夢龍の批評形式」305頁～322頁、および注22前掲書、125頁～134頁。

での残本である。本研究は両版本の対照可能範囲内（巻1第1葉～巻6第17葉）の分析にとどまっており、全30巻からなる映雪草堂本の補刻の全容を明らかにするにはいたっていない。推測の域を出るものではないが、現時点では校勘することができない両版本の対照可能範囲外（巻6第18葉～巻30第20葉）の内容についても、最後に少しばかり私見を述べておくこととしたい。

本論で確認した通り、対照可能範囲内の補刻葉は、補刻葉Aに分類した3葉を除いて、眉批・強調記号・区切記号がいずれも付されないという共通点を有している。このことから、対照可能範囲外に存在する同様の特徴を持つ葉は、本稿で確認した補刻葉35葉と同じく、新たに作られて補版された補刻葉である可能性が考えられる。筆者が調査したところ、両版本の対照可能範囲外の全685葉のうち、当該の特徴を有するものは64葉あり、本論で取り上げた補刻葉B、C、Dの版面上の特徴とも類似性が見られた。<sup>25</sup>これは全体の約9%強に相当する。対照可能範囲内の約26%が補刻葉であったことを考えると、割合が少ないように思われるが、現時点においてこれ以上のことは言えない。

このほかに筆者が気になっていることが二点ある。一つは界線を持つ葉の存在である。映雪草堂本は基本的に無界だが、巻7第28葉、巻10第23・24葉、巻12第23・24葉、巻17第15・16葉、巻26第3・4葉、巻29第9・10・27・28葉の全13葉のみ有界なのである。<sup>26</sup>全ての葉におい

25 補刻葉Bに類似する該当葉：巻7第7・9・24・31葉、巻8第3・4・5葉、巻9第26葉、巻16第1・2葉、巻20第23葉、巻22第1・2・8・11・12・23・24・36・38・39葉、巻23第16葉、巻28第1・2葉〔全24葉〕、補刻葉Cに類似する該当葉：巻7第8葉、巻8第22・26葉、巻13第1・5・6葉、巻14第13・14・19・20葉、巻15第1・2葉、巻21第21葉、巻22第7葉、巻24第1・3葉〔全16葉〕、補刻葉Dに類似する該当葉：巻7第4・19・20・29・30・33葉、巻10第21・22・35・36葉、巻11第1・2・22・24・25・26・31・32葉、巻12第29・30葉、巻13第3・7葉、巻15第13・14葉〔全24葉〕。記号が少量のみ残っていたり、人名を示す傍線の付加方法に揺れが見られたり

26 氏岡氏は巻26第3・4葉について、百二十回本を使用した補配であると分析している。注3前掲論文、101頁。

て区切記号と人名を示す傍線が使用されており、巻 29 第 9・10 葉の組以外は強調記号も使用されている。巻 12 第 23 葉のみ眉批がある。もう一つは眉批が 1 行 2 字になっている葉の存在である。映雪草堂本の眉批は基本的に 1 行 3 字だが、巻 25 だけ巻全体を通して 1 行 2 字になっている。なお、これらの葉には区切記号、強調記号、人名を示す傍線が使用されている。<sup>27</sup> 上述の葉は他の葉と異なる特徴を有しているが、眉批・強調記号・区切記号がいずれも付されないという対照可能範囲内の補刻葉に見られる顕著な特徴には合致しない。一部はいくらか漫漶も進んでいる。そのため、本稿で確認した補刻葉 35 葉とは異なる来歴を持つ可能性が高いのではないかと筆者は推測している。

映雪草堂本に先立つ宝翰楼本の印行に関わった蘇州の書坊宝翰楼について、笠井直美氏は「如衆周知、使用別の書肆所刻版本来印行、発兌的方法是常見的、可以说宝翰楼也是頻繁採用這種出版方法的書肆之一（周知のように、別の書肆が版刻した版本を用いて印行・発兌する方法はよく見られるもので、宝翰楼もまたこの種の出版方法を頻繁に採用する書肆の一つであったと言ってよい）」と述べている。<sup>28</sup> また、氏岡眞士氏は三十卷本『水滸伝』について「初印に近いパリ本すら翻刻の可能性がある」との見解を示し、宝翰楼本よりも更に先行する版本の存在を示唆している。<sup>29</sup>

ここから考えられるのは、宝翰楼本の刊行段階で、先行する版本の版本と新たに作られた版本（複数段階にわたるものであるかもしれない）が既に混在していた可能性である。後に宝翰楼と同じ蘇州地域の書坊である映雪草堂が三十卷本の版本を入手して刊行に携わるが、現存の宝翰楼本が刊行されてから現存の映雪草堂本が刊行されるまでの間に、新たに作られた版本が更に混入していくことになる。<sup>30</sup> 映雪草堂本の版面が全体的な統一性を著しく欠いているのには、このような背景が複合的に関わっている

27 地名を示す傍線は使用されていない。

28 笠井、注 2 前掲論文（2013 年）、315 頁。

29 氏岡、注 3 前掲論文、96 頁。

30 『水滸伝』の文簡本は、福建の建陽の書坊で刊行されたものや、その系統に属するものが主流となっている点を補足しておく。

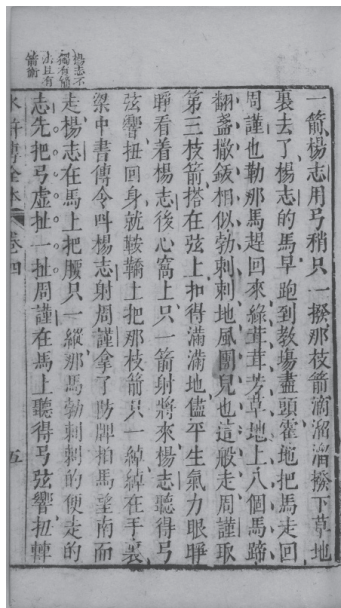
と言えるかもしれない。とはいえ、現存する版本だけでは仮説を述べることはできない。完全な形の宝翰楼本や三十巻本の異なる版本が発見され、全面的な校勘と分析が可能になることを心から願うばかりである。

〔付記〕

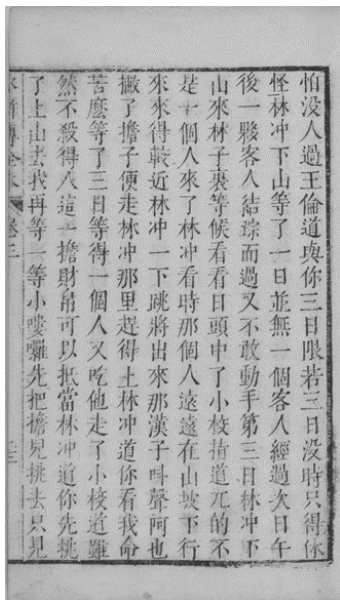
本稿は東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）協働型アジア研究プロジェクト「東京大学所蔵水滸伝諸版本に関する研究」の成果の一部です。プロジェクトを主導する荒木達雄先生と上原究一先生には、版本の調査・分析を進める過程で特に多くのご助言をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。



【図1】補刻葉A（巻四第五葉）



【図2】補刻葉B（巻三第二十二葉）



【図3】右が補刻葉C（巻六第十一葉）

左が補刻葉D（巻六第十二葉）

